

編集後記

国語表現法の時間に「校歌」をとり上げてみた。

学生たち一人ひとりが、母校の中学校（小学校を選んだ学生も数名いる）の校歌をめぐり、制定年・作詞者をおさえたうえで、どんなことばに特徴が表れているか、自分にとって校歌とはどんな存在であったかなどを発表するというもので、そのあと教師のほうで歌詞すべてをワープロで打ち直して印刷し、最後にそれを資料にして自由なテーマでレポートを書く、という授業であった。

一クラス三十五名（高専四年生の三クラスで実施）で、なかには同じ中学校出身者もいるので、学生はおよそ三十校程度の歌詞に融れることになる。高橋掬太郎、勝承夫、宮沢章二という作詞家が常連として登場し、椋鳩十、高田敏子、サトウハチロー、草野心平作詞という校歌もあった。在校生作詞というのも一校ある。

三十校の校歌を並べてみると、一つの校歌からは見えてこないさまざまな問題が現れる。詳しい紹介はできないので、参考までに提出されたレポートの題目だけをいくつかあげてみる。「校歌の歌詞にみられる富士山」「校歌は生徒を何に喻えたか」「時代とことば―高度成長期の校歌の歌詞をめぐって―」「戦前の校歌と戦後の校歌」「校歌で多用される言葉」「校歌をつくる」などである。

戦後つくられた校歌の多くは、地理的条件をあげて、「平和、民主、真理、文化、理想」ということばで子どもたちへの期待を

語り、最後に「ああ、われらが〇〇中学校」で結ばれる。確かにひどくパターン化している。だが「平和、民主……」ということばは、周知のとおり教育基本法の前文のキーワードであり、校歌を歌うことは、教育の力によって「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意」を確認することでもあったのだ（教育を語ることはの類型化という問題は残るのだが……）。こんなことをはじめ、私自身この授業から考えさせられたことも多かった。こうした戦後校歌の原点は時代とともに風化して、おそらく今ではほとんど忘れられているのではないだろうか。

卒業式の季節。生徒たちはどんな思いで校歌を歌い、母校を巣立って（これも校歌特有のことばの一つである）いくのだろうか。（高野光男）

早稲田大学国語教育研究 第十七集

一九九七年三月二十日 発行

発行所 早稲田大学国語教育学会

代表 梶 原 正 昭

東京都新宿区西早稲田一―六―一

早稲田大学教育学部内

振替〇〇一六〇一―八五二七番

印刷所

株式会社 恵 友 社

東京都千代田区飯田橋四―五―十三